



PROFILE
佐久田
エンリケ アンドレス (43)

アルゼンチン出身（祖父が浦添市、祖母が那覇市出身）。浦添市前田の若竹福祉会に勤務。三線では琉球古典音楽野村流音楽協会師範である銘刈盛隆氏に師事。2019年7月新人賞受賞。空手では沖縄小林流空手道協会志道館無聲塾で稽古に励み、黒帯の腕前。琉球大学の「ゆんたく会」でうちなーぐちを学ぶ。2016年からウラシー民間大使として、沖縄传统文化の普及や国際交流推進のために自分ができることをやっていきたいと意気込む。



ROAD

輝く人たち No.31

母国と沖縄の架け橋になりたい どこまでも深い沖縄への想い

二線に空手にうちなーぐち、時にはうちなー芝居に出演するなど、率先して沖縄の文化を学ぶ外国人がいます。アルゼンチン出身の佐久田エンリケ アンドレスさん(43)。アンドレスさんは浦添市前田にルーツを持つ日系3世です。

2017年1月に沖縄に移住したアンドレスさん。きっかけは2011年夏、浦添市が実施している南米移住者子弟研修生受入事業で、初めて沖縄を訪れたことでした。

父親から浦添市にルーツがあることを聞いていたアンドレスさんですが、父親も13歳の時に祖父を亡くしているため、父親はじめ家族みんなそれ以上のことは知りませんでした。「知らなかったというより、知ろうとしなかった」とアンドレスさんは言います。「私は、子どもの頃(6歳〜12歳)、週1回日本語学校に通っていました。両親が日本語を話せないのに通う意味が分からず、なんで日本語を勉強しているのだらうかと思っていました。その時の先生が嫌いで、その影響で幼い頃は日本のことが嫌いだっただ。だから沖縄や浦添市のことあまり興味が無かった」と明かします。

それから大人になっても特に沖縄への思い入れが増すことがなかったアンドレスさんに、アルゼンチンの浦添市人会会長から「浦添市の南米移住者子弟研修生受入事業に応募しないか」と声がかかります。「自分のルーツを知るきっかけになれば」と、研修に志願したアンドレスさんは、沖縄に降り立ったとき「不思議なことに故郷に帰ってきた感じがした」と言います。

6か月の研修期間中、日本語、三線、琉球舞踊など沖縄の文化や歴史など、たくさんのお話を学びました。少しずつ沖縄の魅力を知り、いろいろな人との出会い、つながりができていく中で「アンドレスさんの沖縄への思いが変化していきます。『親戚と会って祖父は確かにこの地で生まれたということを感じた。沖縄の文化に触れ、色々な場所を訪れ、自分こんな美しい沖縄とつながっていたんだ。いつか沖縄に移住したい』と思うようになります。」

うちなーんちゅとしてのアイデンティティが芽生えたアンドレスさんは、浦添での研修を終えアルゼンチンに戻っても、仕事をしながらお金を貯め、日本語や三線、空手を学び続け、夢に向かってまい

進みます。2015年には那覇市の研修生として2か月、2016年には浦添市のフォローアップ研修として2週間沖縄を訪れ、その度に沖縄への思いを強くします。そして、自分の中で機は熟したと移住を決め今に至ります。「移住する夢は遠かったです。それでもずっと夢をあきらめずにアルゼンチンで頑張った」と感慨深そうに話します。

アンドレスさんは今、福祉施設で介護の仕事をしてながら大好きな三線、空手の稽古に励み、そしてうちなーぐちの勉強を続けています。「縁あって、私のルーツである前田で働いていることはとても幸せなこと。私の好きな言葉は『まきらん！(負けない)』といううちなーぐち。意味と響きが好きです。生きていたら壁にぶつかるとも。その言葉が私を前に向きにさせる。何かあっても『まきらん！』そう思って日々過ごしています」とアンドレスさんは力強く語ります。

「私は沖縄に永住したいと思っています。その中で沖縄の伝統的な文化をもっと知り、私のように沖縄にルーツを持つ子弟に沖縄の素晴らしさを伝え、沖縄との懸け橋になりたいです」。そう語るアンドレスさんの目は輝き、どこまでも深く強い沖縄を愛する想いにあふれていました。